

【事例紹介】(第7回日本禁煙科学会学術総会 優秀演題賞受賞)

終末期がん患者における禁煙支援を通して

夏井 ルミ¹⁾ 石田 あや子²⁾ 館野 博喜³⁾

キーワード：終末期・がん・禁煙支援・医療者意識変化

【はじめに】

がん患者における禁煙の有効性はすでに報告されている¹⁾⁻⁴⁾。しかし医療従事者は、終末期の患者に対して、喫煙は病状に良くないと思いつつも、禁煙を勧めることを躊躇することがある。今回当院で、終末期の患者に禁煙支援を実施したことが医療従事者の禁煙に対する意識の変化につながった症例を経験したので、ここに報告する。

【症 例】

46歳女性A、進行子宮頸がん

42歳時に不正出血から、子宮頸がんⅡb期と診断され、放射線同時併用化学療法を施行した。その後再発を認めるも、積極的な治療は希望せず経過観察を行っていた。

45歳時に不正出血を認め化学療法を再開した。しかし病状は進行性であり、がんの進行に伴う緩和治療のためオピオイド等の投与を受けていた。今回は発熱を認め入院し、骨盤腫瘍増大による両側水腎症に対し右腎瘻が造設されていた。

喫煙は18歳から開始。禁煙チャレンジ経験は妊娠中に2～3回あるが、最長3時間程度であった。

喫煙20本×28年 TDS=9点 FTND=7

【禁煙経過】

過去にがん治療のため十数回入院を繰り返していたが、喫煙のため、病室を離れる姿がたびたび見られた。

担当医師・看護師が禁煙を勧めても、これまでは本人から禁煙に対する前向きな意思表示はなかった。

今回の入院においては、当初は終末期であることを考慮し、担当の医師・看護師は、この患者に対して禁煙に取り組むことは難しいのではないかと考え、禁煙を勧めることはなかった。しかし、入院30日目にはADLが低下し、家族が不在の時には看護師が院外の喫煙できる場所まで連れて行くなど、医療スタッフの介助が必要となった。不要な外出は、不安定な病状からも望ましいことではなく、医師からこの患者の喫煙への対応について、禁煙支援看護師に相談があった。

禁煙支援看護師が患者と面談した際、患者は「身体がしんどいに行かざるを得ない。看護師さんにも迷惑をかけている。こんな自分自身が情けない。今までは禁煙しようとは思わなかった。禁煙できたらと思うが、数時間しか我慢できない。こんな私に禁煙できるか自信がない。」と話した。禁煙支援看護師が禁煙支援治療について説明を行うと「私にもできるでしょうか?できれば私も禁煙したい。」という言葉が聞かれたので、退院後に禁煙外来を受診することになった。

禁煙外来の初診は退院後12日目であった。初診時、NRTが通常量処方された。使用後はNRTを使用すると本人が思っていた以上に順調に禁煙ができたとのことで、NRTは10日間で自己終了した。子供達に「ママすごいね」と言われたことが励みになり、禁煙意欲が継続できたとのことであった。

1) さいたま市立病院 禁煙支援看護師/副看護師長
2) さいたま市立病院 禁煙支援看護師/副看護師長
3) さいたま市立病院 禁煙支援医師/内科科長

責任者連絡先：夏井 ルミ
さいたま市緑区三室2460 (〒333-8522)
さいたま市立病院
TEL:048-873-4111(代表)

禁煙外来の4回目の受診後、疼痛と歩行困難のため再入院した。禁煙外来の5回目は、入院中であったため、医師と看護師で病室を訪ねて卒煙式を行った。患者からは「こんな自分でもタバコを止めることができました。子供にもやり遂げる姿勢をみせることができて良かったです。本当にありがとうございました。」との言葉が聞かれた。

【結果】

本事例においては、当初は終末期であることを理由に、担当の医師・看護師は、この患者に対して禁煙に取り組むことは難しいのではないかと考え、禁煙を勧めることはなかった。しかし禁煙外来経過に接し、主治医からは終末期患者さんでも禁煙ができ、本人に大きな成果を与えることは素晴らしいとのコメントがあった。また関わった看護師からは、病室で嬉しそうに卒煙の賞状を見せていたことについての報告が寄せられ、「終末期の患者さんでも禁煙することの大切さを感じました。」との報告があった。

【考察】

本例は終末期のがん患者に禁煙支援を行い、禁煙を達成し、亡くなる1カ月前に卒煙証書を進呈した事例であった。家族や子供達から褒められたことが、患者の自信や喜びにも繋がった。終末期でも禁煙に遅すぎることではなく、患者のQOLや幸福感を高めることができることを、本症例を通して経験することで、医療者の禁煙に対する意識の変化にもつながった。

終末期の患者であっても、禁煙することで前向きに自分を捉え、身体の苦痛の軽減にもつながると報告されている^{1)~4)}。本事例においては、患者は自信の無さから禁煙の希望があっても口に出すことはなく、一方医療者は禁煙に対する患者の過去の消極的な発言や、病状が終末期であることから禁煙することは無理と判断していた。禁煙支援看護師の介入により禁煙支援が実現した経験は医療者に意識の変化をもたらしたことは貴重であった。患者が潜在的に持つ禁煙希望を引き出すような関わり方や、終末期でも禁煙に遅すぎることなく、患者のQOLや幸福感を高めることができることを、医療者に伝えていくことも重要と考えられた。

【結語】

終末期患者における禁煙支援を通して、医療者の意識の変化につながる経験が得られた。

【参考文献】

- 1) Associations between pain and current smoking status among cancer patients. JW Ditre *et al.* *Pain.* 2011;152:60.
- 2) Smoking cessation after diagnosis of lung cancer is associated with a beneficial effect on performance status. S Baser *et al.* *Chest.* 2006;130:783.
- 3) 終末期患者の禁煙支導 エキスパートナース 2009;5
- 4) 禁煙指導・支援者のための禁煙科学 2007